

昭和

谷崎潤一郎

芥川龍之介

永井荷風

佐藤春夫

文学全集

小学館

昭和文学全集



1

谷崎潤一郎

芥川龍之介

永井荷風

昭和文学全集

第1巻

昭和六二年五月一日 初版第一刷発行

著者 谷崎潤一郎 芥川龍之介 永井荷風 佐藤春夫

発行者 相賀徹夫

発行所 小学館

〒100 東京都千代田区一ツ橋 丁目三番一号

振替 東京八十一〇〇番

電話 編集・〇三―三三〇―五六九六

業務・〇三―三三〇―五三三三

販売・〇三―三三〇―五七三九

印刷 大日本印刷株式会社

製本 大日本印刷株式会社

若林製本工場

用紙 三菱製紙株式会社

著者検印は省略いたしました

定価=4,000円

Printed in Japan ISBN4-09-568001-6
©MATSUKO TANIZAKI HISAMITSU NAGAI
MASAYA SATO 1987

*造本には十分注意しておりますが、万一、落丁・乱丁などの不良品がありましたら、おとりかえいたします。 *本書の内容の一部または全部を、無断で複写複製(コピー)することは、法律で認められた場合を除き、著者および出版者の権利の侵害となりますので、その場合はあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

目次

谷崎潤一郎 5

7 春琴抄

3 7 蘆刈

6 2 卅(まんじ)

1 4 7 蓼喰う虫

2 2 5 武州公秘話

2 9 6 瘋癲老人日記

3 6 6 幼少時代

4 6 5 陰翳礼讃

芥川龍之介 485

4 8 7 河童

5 1 3 大導寺信輔の半生

5 2 2 湖南の扇

5 2 9 年末の一日

5 3 2 点鬼簿

5 3 6 玄鶴山房

5 4 5 蜃気楼

5 4 9 三つのなぜ

5 5 2 誘惑

5 6 0 鹵車

5 7 8 闇中問答

5 8 3 或阿呆の一生

5 9 4 侏儒の言葉

永井荷風 629

631 瀬東綺譚

671 つゆのあとさき

721 ひかげの花

754 勲章

759 踊子

782 断腸亭日乗（昭和二十年・二十一年）

佐藤春夫 841

843 晶子曼陀羅

937 窓展く

943 山妖海異

952 熊野路

982 観潮楼附近

1009 森鷗外のロマンティシズム

（「近代日本文学の展望」より）

1022 兼好と長明と

1033 作家アルバム

解説

1041 谷崎潤一郎……山本健吉

1049 芥川龍之介……小川国夫

1056 永井荷風……後藤明生

1063 佐藤春夫……桶谷秀昭

年譜

1070

谷崎潤一郎……平山城児

1076

芥川龍之介……三好行雄

1081

永井荷風……竹盛天雄

1086

佐藤春夫……牛山百合子

1092

底本について

1093

用字用語について

谷崎潤一郎



春琴抄

○

春琴、ほんとうの名は鵜屋琴、大阪道修町の薬種商の生れで、歿年は明治十九年十月十四日、墓は市内下寺町の浄土宗の某寺にある。先達通りかかりにお墓参りをする気になり立ち寄つて案内を乞うと「鵜屋さんの墓所はこちらでございます」といって寺男が本堂のうしろの方へ連れて行つた。見ると一と叢の椿の木かげに鵜屋家代々の墓が数基ならんでいるのであつたが琴女の墓らしいものはそのあたりには見あたらない。むかし鵜屋家の娘にしかじかの人があつた筈ですがその人のはというのと暫く考えていて「それならあれにありますのがそれかも分りませぬ」と東側の急な坂路になつてゐる段々の上へ連れて行

く。知つての通り下寺町の東側のうしろには生国魂神社のある高台が聳えてゐるので今いう急な坂路は寺の境内からその高台へつづく斜面なのであるが、そこは大阪にはちよつと珍しい樹木の繁つた場所であつて琴女の墓はその斜面の中腹を平らにしたさやかな空地に建つてゐた。光譽春琴恵照禪定尼、と、墓石の表面に法名を記し裏面に俗名鵜屋琴、号春琴、明治十九年十月十四日歿、行年五拾八歳とあつて、側面に、門人温井佐助建之と刻してある。琴女は生涯鵜屋姓を名のつてゐたけれども「門人」温井檢校と事実上の夫婦生活をしてゐたので斯く鵜屋家の墓地と離れたところへ別に一基を選んだのであろうか。寺男の話では鵜屋の家はどうに没落してしまひ近年は稀に一族の者がお参りに来るだけであるがそれも琴女の墓を訪うことは殆ど

ないのでこれが鵜屋さんの身内のお方のものであろうとは思わなかつたという。すると此の仏さまは無縁になつてゐるのですかというといへ無縁という訳ではありませぬ萩の茶屋の方に住んでおられる七十恰好の老婦人が年に一二度お参りに来られます、そのお方は此のお墓へお参りをされて、それから、それ、此処に小さなお墓があるでしょうと、その墓の左脇にある別な墓を指し示しながらきつとそのあとで此のお墓へも香華を手向けて行かれますお経料などもそのお方がお上げになりますという。寺男が示した今の小さな墓標の前へ行つて見ると石の大きさは琴女の墓の半分くらいである。表面に眞譽琴台正道信士と刻し裏面に俗名温井佐助、号琴台、鵜屋春琴門人、明治四十年十月十四日歿、行年八拾三歳とある。即ちこれが温井檢校の墓であつた。萩の茶屋の老婦人というのは後に出て来るから此処には説くまいただ此の墓が春琴の墓にくらべて小さく且その墓石に門人である旨を記して死後にも師弟の礼を守つてゐるところに檢校の遺志がある。私は、折柄夕日が墓石の表にあかあかと照つてゐるその丘の上にいで脚下にひろがる大大阪市の景観を眺めた。蓋し此のあたりは難波津の昔からあつた天王寺の方へ続いている。そして現在では

煤煙で痛めつけられた木の葉や草の葉に生色がなく埃まびれに立ち枯れた大木が殺風景な感じを与えるがこれらの墓が建てられた当時はもつと鬱蒼としていたであらうし今も市内の墓地としては先ず此の辺が一番閑静で見晴らしのよい場所であらう。奇しき因縁に纏われた二人の師弟は夕靄の底に大ビルディングが数知れず屹立する東洋一の工業都市を見下しながら、永久に此処に眠っているのである。それにしても今日の大阪は檢校が在りし日の佛をとどめぬ迄に変わってしまったが此の二つの墓石のみは今も浅からぬ師弟の契りを語り合っているように見える。元来温井檢校の家は日蓮宗であつて檢校を除く温井一家の墓は檢校の故郷江州日野町の某寺にある。然るに檢校が父祖代々の宗旨を捨てて浄土宗に換えたのは墓になつても春琴女の側を離れまいという殉情から出たもので、春琴女の存生中、早く既に師弟の法名、此の二つの墓石の位置、釣合い等が定められてあつたという。目分量で測つたところでは春琴女の墓石は高さ約六尺、檢校のは四尺に足らぬ程であらうか。二つは低い石製の壇の上に並んで立っていて春琴女の墓の右脇に一本の松が植えてあり緑の枝が墓石の上へ屋根のように伸びているのであるが、その枝の先が届かなくなつた左の方の二三尺離れたところに檢校の墓が

鞠躬如として待坐する如く控えている。それを見ると生前檢校がまめまめしく師に事えて影の形に添うように扈從していた有様が偲ばれ恰も石に霊があつて今日もなおその幸福を楽しんでゐるようである。私は春琴女の墓前に跪いて恭しく礼をした後檢校の墓石に手をかけてその石の頭を愛撫しながら夕日が大手街の彼方に沈んでしまふまで丘の上に低徊していた

○

近頃私の手に入れたものに「鴎屋春琴伝」という小冊子があり此れが私の春琴女を知るに至つた端緒であるが此の書は生漉きの和紙へ四号活字で印刷した三十枚程のもので察するところ春琴女の三回忌に弟子の檢校が誰かに頼んで師の伝記を編ませ配り物にでもしたのであらう。されば内容は文章体で綴つてあり檢校のことも三人称で書いてあるけれども恐らく材料は檢校が授けたものに違ひなく此の書のほんとうの著者は檢校その人であると見て差支えあるまい。伝に依ると「春琴の家は代々鴎屋安左衛門を称し、大阪道修町に住して薬種商を営む。春琴の父に至りて七代目也。母しげ女は京都数屋町の跡部氏の出にして安左衛門に嫁し二男四女を挙げ。春琴はそ

の第二女にして文政十二年五月二十四日を以て生る」とある。又曰く、「春琴幼にして穎悟、加ふるに容姿端麗にして高雅なること譬へんに物なし。四歳の頃より舞を習ひけるに举措進退の法自ら備はりてさす手ひく手の優艶なること舞妓も及ばぬ程なりければ、師もしばく舌を巻きて、あはれ此の児、此の材と質とを以てせば天下に嬌名を誦はれんこと期して待つべきに、良家の子女に生れたるは幸とや云はん不幸とや云はん」と呟きしかや。又早くより読み書きの道を学ぶに上達頗る速かにして二人の兄をさへ凌駕したりき」と。これらの記事が春琴を視ること神の如くであつたらしい檢校から出たものとすればどれほど信を置いてよいか分らないけれども彼女の生れつきの容貌が「端麗にして高雅」であつたことはいろいろな事実から立証される。當時は婦人の身長が一体に低かつたようであるが彼女も身の丈が五尺に充たず顔や手足の道具が非常に小作りで繊細を極めていたという。今日伝わっている春琴女が三十七歳の時の写真というものを見るのに、輪郭の整つた瓜実顔に、一つ一つ可愛い指で摘まみ上げたような小柄な今にも消えてなくなりそうな柔かな目鼻がついている。何分にも明治初年か慶応頃の撮影であるからところどころに星が出たりして遠い昔の記憶の如くうすれて

いるのでそのためにそう見えるのもあろうが、その朦朧とした写真では大阪の富裕な町家の婦人らしい気品を認められる以外に、うつくしいけれども此れという個性の閃めきがなく印象の稀薄な感じがする。年恰好も三十七歳といえども見え又二十七八歳のようにも見えなくはない。此の時の春琴女は既に両眼の明を失つてから二十有余年の後であるけれども盲目というよりは眼をつぶっているという風に見える。嘗て佐藤春夫が云つたことに聾者は愚人のように見え盲人は賢者のように見えるという説があつた。なぜならつんぽは人の云うことを聴こうとして眉をしかめ眼や口を開け首を傾けたり仰向けたりするので何となく間の抜けたところがある然るに盲人はずかに端坐して首をうつ向け、瞑目沈思するかの如き様子をするからいかにも考え深そうに見えるのであつて果して一般に当て嵌まるかどうか分らないがそれは一つには仏菩薩の眼、慈眼視衆生という慈眼なるものは半眼に閉じた眼であるからそれを見馴れているわれわれは開いた眼よりも閉じた眼の方に慈悲や有難みを覚え或る場合には畏れを抱くのであろうか。されば春琴女の閉じた眼險にもそれが取り分け優しい女人であるせいか古い絵像の観世音を拝んだようなほのかな慈悲を感じるのである。聞くところに依る

と春琴女の写真は後にも先にも此れ一枚しかないのであるという彼女が幼少の頃はまだ写真術が輸入されておらず又此の写真を撮つた同じ年に偶然或る災難が起りそれより後は決して写真などを写さなかつた筈であるから、われわれは此の朦朧たる一枚の映像をたよりに彼女の風貌を想見するより仕方がない。読者は上述の説明を読んでどういふ風な面立ちを浮かべられたか恐らく物足りないばんやりしたものを心に描かれたであらうが、仮りに実際の写真を見られても格別これ以上にはつきり分るということはなからう或は写真の方向が読者の空想されるものよりもつとばやけているのであろう。考えてみると彼女が此の写真をつつした年即ち春琴女が三十七歳の折に検校も亦盲人になつたのであつて、検校が此の世で最後に見た彼女の姿は此の映像に近いものであつたかと思われる。すると晩年の検校が記憶の中に存していた彼女の姿も此の程度にばやけたものではなかつたであらうか。それとも次第にうすれ去る記憶を空想で補つて行くうちに此れとは全然異なつた一人の別な貴い女人を作り上げていたであらうか。

○

春琴伝は続けて曰く、「されば両親も琴女を

視ること掌中の珠の如く、五人の兄妹達に超えて唯り此の児を寵愛しけるに、琴女九歳の時不幸にして眼疾を得、幾くもなくして遂に全く両眼の明を失ひければ、父母の悲歎大方ならず、母は我が児の不憫さに天を恨み人を憎みて一時狂せるが如くなりき。春琴これより舞技を断念して専ら琴三絃の稽古を励み、糸竹の道を志すに至りぬ」と。春琴の眼疾というのは何であつたか明かでなく伝にも此れ以上の記載がないが後に検校が人に語つてまことに喬木は風に妬まれるとやら、お師匠さまは御器量や芸能が諸人にすぐれておられたばかりに一生のうちに二度までも人の嫉みをお受けなされたお師匠さまの御不運は全く此の二度の御災難のお蔭じゃと云つたのを思い合わせれば、何かその間に事情が伏在するようでもある。検校は又お師匠さまのは風眼であつたとも云つた。春琴女は甘やかされて育つたために驕慢なところはあつたけれども言語動作が愛嬌に富み目下の者への思いやりが深く加うるに至つて花やかな陽気な性質であつたから、人あたりもよく兄弟仲も睦じく一家中の者に親しまれたが一番末の妹に附いていた乳母が両親の愛情の偏頗なのを憤つて密かに琴女を憎んでいたという。風眼というのは人にも知る如く花柳病の黴菌が眼の粘膜を侵す時に生ずるのであるから検校の意は、蓋

し此の乳母が或る手段を以て彼女を失明させたことを諷するのである。しかし確かな根拠があつてそう思うのか、検校一人だけの想像説であるのか明瞭でない。春琴女が後年の烈しい気象を見れば或はそういう事実が性格に影響を及ぼしたのかも猜せられなくはないが此の事に限らず、検校の説には春琴女の不幸を歎くあまり知らず識らず他人を傷つけ呪うような傾きがあり俄かに悉くを信する訳に行かない乳母の一件なども恐らくは揣摩臆測に過ぎないであらう。要するに此処では敢て原因を問わず唯九歳の時に盲目になったことを記せば足りる。そして「これより舞技を断念して専ら琴三絃の稽古を励み、糸竹の道を志した。つまり春琴女が思いを音曲にひそめるようになったのは失明した結果だということになり彼女自身も自分のほんとうの天分は舞にあつた、わたしの琴や三味線を褒める人があるのはわたしというものを知らないからだ眼さえ見えたら自分は決して音曲の方へは行かなかつたのにと常に検校に述懐したという。これは半面に自分の不得意な音曲でさえ此のくらゐに出来るという風に聞え彼女の驕慢な一端が窺われるが此の言葉なども多少検校の修飾が加わつてはいはしないか少くとも彼女が一時の感情に任せて発した言葉を有難く肝に銘じて聴き、彼女を偉くするために重大

な意味を持たせた嫌いがありはしないか。前掲の萩の茶屋に住んでいる老婦人というのは鳴沢とるといい生田流の勾当で晩年の春琴と温井検校に親しく仕えた人であるが此の勾当の話聞くに、お師匠さま「春琴のこと」は舞がお上手だったそうにござりますが琴や三味線も五つ六つの時分から春松という検校さんに手ほどきをしてお貰いなされそれからずっと稽古を励んでおられました、それ故盲目になつてから始めて音曲を習われたのではないのでござります、よいお内の娘さん方は皆早くから遊芸のけいこをされますのがその頃の習慣でござりましたお師匠さまは十の歳にあのむずかしい「残月」の曲を聞き覚えて独りて三味線にお取りなされたと申し升そうしてみれば音曲の方にも生れつきの天才を備えておられたのでござりましょうなかなか凡人には真似られぬことでござりますただ盲目になられてからは外に楽しみがござりませぬので一層深く斯の道へお這入りなされ、精魂を打ち込まれたのかとぞんじますとのことであります。多分此の説の方がほんとうなので彼女の真の才能は実は始めより音楽に存したのであらう舞踊の方は果してどの程度であつたか疑わしく思われる

○

音曲の道に精魂を打ち込んだとはいふものの生計の心配をする身分ではないから最初はそれを職業にしようという程の考はなかつたであらう後に彼女が琴曲の師匠として門戸を構えたのは別種の事情がそこへ導いたのであり、そうなつてからでもそれで生計を立てたのではなく月々道修町の本家から仕送る金子の方が比較にならぬ程多額だったのであるが、彼女の驕奢と贅沢とはそれでも支えきれなかつた。されば始めは格別将来の目算もなく唯好きにまかせて一生懸命に技を研いたのであらうが天稟の才能に熱心が拍車をかけたので、「十五歳の頃春琴の技大いに進みて儕輩を抽んで、同門の子弟にして実力春琴に比肩する者一人もなかりき」とあるのは恐らく事実であらう。鳴沢勾当曰くお師匠さまがつも自慢をされましたの春松検校は随分稽古が厳しいお方だったけれど、わたしは身に沁みて叱られたということがなかつた褒められたことの方が多かつた、私が行くとお師匠さんは必ず御自分で稽古をつけて下されそれはそれは親切に優しく教えて下さるのでお師匠さんを怖がる人たちの気が知れなんだというのでござります、でござりますから修行

の苦しみというものを知らずにあれまでにおなりなされたのは天品だったのでござりましよう。蓋し春琴は鴎屋のお嬢様であるからいかに厳格な師匠でも芸人の児を仕込むような烈しい待遇をする訳に行かない幾分か手心を加えたのであろうその間には又、千金の家に生れながら不幸にして盲目となった可憐な少女を庇護する感情もあつたらうけれ共何よりも師の檢校は彼女の才を愛し、それに惚れ込んだのであつた。彼は我が兄以上に春琴の身を案じたたまふ微恙で欠席する等のことがあれば直ちに使を道修町に走らせ或は自ら杖を曳いて見舞つた。常に春琴を弟子に持つてゐることを誇りとして人に吹聴し玄人筋の門弟たちが大勢集まつてゐる所でお前達は鴎屋のこいさんの芸を手本とせよ〔注・大阪では「お嬢さん」のことを「糸さん」或は「とうさん」といい姉嬢に対して妹嬢を「小糸さん」或は「こいさん」などと呼び分けること現在も然り。春松檢校は春琴の姉にも手ほどきをしたことあり家庭的に親しかつたので春琴を斯く呼んだのであろう〕今に腕一本で食べて行かなければならない者が素人のこいさんに及ばないようでは心細いぞといった。又春琴をいたわり過ぎるという批難があつた時何をいうぞ師たる者が稽古をつけるには厳しくするこそ親切なのじゃわしがあの児を叱ら

ぬのはそれだけ親切が足らぬのじゃあの児は天性芸道に明るく悟りが速いから捨て置いてても進む所までは進む本気で叩き込んだらば愈々後生畏ろしい者になり本職の弟子共が困るであらう、何も結構な家に生れて世過ぎに不自由のない娘をそれ程に教え込まずとも鈍根の者をこそ一人前に仕立ててやろうと力瘤を入れてゐるのに、何という心得違いをいうぞといった

○

春松檢校の家は鞆にあつて道修町の鴎屋の店からは十丁程の距離であつたが春琴は毎日丁稚に手を曳かれて稽古に通つたその丁稚というのが当時佐助と云つた少年で後の温井檢校であり、春琴との縁が斯くして生じたのである。佐助は前に述べた如く江州日野の産であつて実家は矢張薬屋を営み彼の父も祖父も見習い時代に大阪に出て鴎屋に奉公をしたことがあるという鴎屋は実に佐助に取つて累代の主家であつた。春琴より四つ歳上で十三歳の時に始めて奉公に上つたのであるから春琴が九つの歳即ち失明した歳に当るが彼が来た時は既に春琴の美しい瞳が永久に鎖された後であつた。佐助は此のことを、春琴の瞳の光を一度も見なかつたことを後年に至るまで悔い

ていない却つて幸福であるとした。若し失明以前を知つていたら失明後の顔が不完全なものに見えたらうけれども幸ひ彼は彼女の容貌に何一つ不足なものを感じなかつた最初から円満具足した顔に見えた。今日大阪の上流の家庭は争つて邸宅を郊外に移し令嬢たちも亦スポーツに親しんで野外の空氣や日光に触れるから以前のような深窓の佳人式箱入娘はいなくなつてしまつたが現在でも市中に住んでゐる子供たちは一般に体格が纖弱で顔の色なども概して青白い田舎育ちの少年少女とは皮膚の汗え方が違ふ良く云えば垢抜けがしてゐるが悪く云えば病的である。これは大阪に限つたことでなく都会の通有性だけれども江戸では女でも浅黒いのを自慢にしたくらいで色の白さは京阪に及ばない大阪の旧家に育つたぼんちなどは男でさえ芝居に出て来る若旦那そのままにきやしゃで骨細なのがあり、三十歳前後に至つて始めて顔が赭く焼けて来て脂肪を湛え急に体が太り出して紳士然たる貴族を備えるようになるその時分までは全く婦女子も同様に色が白く衣服の好みも随分柔弱なのである。まして旧幕時代の豊かな町人の家に生れ、非衛生的な奥深い部屋に垂れ籠めて育つた娘たちの透き徹するような白さと青さと細さとはどれ程であつたか田舎者の佐助少年の眼にそれがいかばかり妖しく艶に映つた

か。此の時春琴の姉が十二歳直ぐ下の妹が六歳で、ぽっと出の佐助には孰れも鄙には稀な少女に見えた分けても盲目の春琴の不思議な氣韻に打たれたという。春琴の閉じた眼瞼が姉妹たちの開いた瞳より明るくも美しくも思われて此の顔は此れでなければいけないのだからあるのが本来だという感じがした。四人の姉妹のうちで春琴が最も器量よしという評判が高かったのは、たといそれが事実だとしても幾分か彼女の不具を憐れみ惜しむ感情が手伝っていたであろうが佐助に至ってはそうでなかった。後日佐助は自分の春琴に対する愛が同情や憐愍から生じたという風に云われることを何よりも厭いそんな觀察をする者があると心外千万であるとした。わしはお師匠様のお顔を見てお氣の毒とかお可哀そうとか思ったことは一遍もないぞお師匠様に比べると眼明きの方がみじめだぞお師匠様があの御氣象と御器量で何で人の憐れみを求められよう佐助どんは可哀そうじゃと却ってわしを憐れんで下すつたものじゃ、わしやお前達は眼鼻が揃っているだけで外の事は何一つお師匠様に及ばぬわしたちの方が片羽ではないかと云った。但しそれは後の話で佐助は最初燃えるような崇拜の念を胸の奥底に秘めながらまめまめしく仕えていたのであろうまだ恋愛という自覚はなかったであらうし、あっても相手

は頑でないこいさんである上に累代の主家のお嬢様である佐助としてはお供の役を仰せ付かって毎日一緒に道を歩くことの出来るのがせめてもの慰めであっただろう。いつたい新参の少年の身を以て大切なお嬢様の手曳きを命ぜられたというのは変なようだが始めは佐助に限っていたのではなく女中が附いて行くこともあり外の小僧や若僧が供をすることもありいろいろであったのを或る時春琴が「佐助どんにしてほしい」といったのでそれから佐助の役に極まつたそれは佐助が十四歳になつてからである。彼は無上の光榮に感激しながらいつも春琴の小さな掌を己れの掌の中に収めて十丁の道のりを春松校の家に引き稽古の済むのを待つて再び連れて戻るのであったが途中春琴はめつたに口を利いたことがなく、佐助もお嬢様が話しかけて来ない限りは黙々として唯過ちのないように氣を配つた。春琴は「何でこいさんは佐助どんがええお云いでしたんでつか」と尋ねる者があつた時「誰よりもおとなしゅうていらんこと云えへんよつて」と答えたのであつた。元来彼女は愛嬌に富み人あたりが良かったことは前に述べた通りだけれども失明以来氣むずかしく陰鬱になり晴れやかな声を出すことや笑うことが少く口が重くなつていたので、佐助が余計なおおしゃべりをせず役目だけを大切に勤めて

邪魔にならぬようにしている所が気に入つたのであるかも知れない「佐助は彼女の笑う顔を見るのが厭であつたという蓋し盲人が笑う時は間が抜けて哀れに見える佐助の感情ではそれが堪えられなかったのであろう」

○

おしゃべりをしないから邪魔にならぬからというのが果して春琴の真意であつたか佐助の憧憬の一念がおぼろげに通じて子供ながらもそれを嬉しく思つたのではなかったか十歳の少女にそういうことは有り得ないとも考えられるが、俊敏で早熟の上に盲目になつた結果として第六感の神経が研ぎ澄まされてもいたことを思うと必ずしも突飛な想像であるとはいえない氣位の高い春琴は後に戀愛を意識するようになってからでも容易に胸中を打ち明けず久しい間佐助に許さなかつたのである。さればそこに多少の疑問はあるけれども兎に角始め佐助というものの存在は殆ど春琴の念頭にないかの如くであつた少くとも佐助にはそう見えた。手曳きをする時佐助は左の手を春琴の肩の高さに捧げて掌を上に向けそれへ彼女の右の掌を受けるのであつたが春琴には佐助というものが一つの掌に過ぎないようであつた偶々用をさせる時にもしぐさで示した

り顔をしかめてみせたり謎をかけるようにひとりとぐとを洩らしたりしてどうせよこうせよとはつきり意志を云い現わすことはなく、それを気が付かずにいると必ず機嫌が悪いので佐助は絶えず春琴の顔つきや動作を見落さぬように緊張していなければならず恰も注意深さの程度を試されているように感じた。もとも我々が儘なお嬢様育ちのところへ盲人に特別な意地悪さも加わって片時も佐助に油断する暇を与えなかった。或る時春松檢校の家で稽古の順番が廻って来るのを待っている間にふと春琴の姿が見えなくなったので佐助が驚いてその辺を捜すと知らぬ間に厠に行っているのであった。いつも小用に立つ時には黙って春琴が出て行くのをそれと察して追いかけてながら戸口まで手を曳いて連れて行き、そこに待っていて手水の水をかけてやるのに今日は佐助がうっかりしていたのでそのまま独り手さぐりで行ったのである。「済まんことでござりました」と佐助は声をふるわせながら、厠から出て手水鉢の柄杓を取ろうと手を伸ばしている少女の前に駈けて来て云ったが春琴は「もうええ」と云いつつ首を振った。しかしこういう場合「もうええ」といわれても「そうでござりますか」と引き退っては一層後がいけないのである無理にも柄杓を掻き取るようにして水をかけてやるのがコツなの

である。又或る夏の日の午後順番を待っている時うしろに畏まって控えていると「暑い」と独りごとを洩らした「暑うござりますなあ」とおあいそを云ってみたが何の返事もせず暫くすると又「暑い」という、心づいて有り合わせた団扇を取り背中の方からおいでやるとそれで納得したようであったが少しでもおおき方が気が抜けるとすぐ「暑い」を繰り返した。春琴の強情と氣儘とは斯くの如くであつたけれども特に佐助に対する時がそうなのであつて孰れの奉公人にもという訳ではなかつた元来そういう素質があつたところへ佐助が努めて意を迎えるようにしたので、彼に對してのみその傾向が極端になつて行つたのである彼女が佐助を最も便利に思つた理由も此処にあるのであり佐助も亦それを苦役と感ぜず寧ろ喜んだのであつた彼女の特別な意地悪さを甘えられているように取り、一種の恩寵の如くに解したのであろう

○

春松檢校が弟子に稽古をつける部屋は奥の二階にあつたので佐助は番が廻つて来ると春琴を導いて段梯子を上り檢校とさし向いの席に直らせて琴なり三味線なりをその前に置き、一旦控え室へ下つて稽古の終るのを待ち

再び迎へに行くのであるが待っている間ももう落し頃かと油断なく耳を立てていて済んだら呼ばれない中に立ち立って行くようにしたされば春琴の習っている音曲が自然と耳につくようになるのも道理である佐助の音楽趣味は斯くして養われたのであつた。後年一流の大家になつた人であるから生れつきの才能もあつたらうけれども若し春琴に仕える機会を与えられず又何かにつけて彼女に同化しようとする熱烈な愛情がなかつたならば、恐らく佐助は鴉屋の暖簾を分けて貰い一介の菓種商として平凡に世を終つたであらう後年盲目となり檢校の位を称してからも常に自分の技は遠く春琴に及ばずと為し全くお師匠様の啓発に依つて此処まで来たのであるといつていた。春琴を九天の高さに持ち上げ百歩も二百歩も謙つていた佐助であるから斯かる言葉をもそのまま受け取る訳には行かないが、技の優劣は兎に角として春琴の方がより天才肌であり佐助は刻苦精勵する努力家であつたことだけは間違ひがあるまい。彼が密かに一挺の三味線を手に入れようとして主家から給される時々の手あてや使い先で貰う祝儀などを貯金し出したのは十四歳の暮であつて翌年の夏よりよう粗末な稽古三味線を買ひ求めると番頭に見咎められぬように棹と胴とを別々に天井裏の寝部屋へ持ち込み、夜な夜な朋輩の寝

静まるのを待つて独り稽古をしたのである。しかし当初は、父祖の業を継ぐ目的で丁稚奉公に住み込んだ身の将来これを本職にしようという覚悟も自信もあつたのではなかった。唯春琴に忠実である余り彼女の好むところのものを己れも好むようになりそれが昂じた結果であり音曲を以て彼女の愛を得る手段に供しようなどの心すらもなかったことは、彼女にさえ極力秘していた一事を以て明かである。佐助は五六人の手代や丁稚共と立つと頭がつかえるような低い狭い部屋へ寝るので彼等の眼りを妨げぬことを条件として内証にしておいてくれるように頼んだ。幾ら眠つても寝足りない年頃の奉公人共は床に這入ると忽ちぐっすり寝入つてしまふから苦情をいう者はいなかったけれども佐助は皆が熟睡するのを待つて起き上り布団を出したあとの押入の中で稽古をした。それでなくても天井裏は蒸し暑いのに押入の中の夏の夜の暑さは格別であつたに違ひないが斯うすると絃の音の外へ洩れるのを防ぐことが出来、軒こえや寝言など外部の音響をも遮断するに都合が好かつた勿論爪弾きで撥は使えなかつた灯火のない真つ暗な所で手さぐりで弾くのである。しかし佐助はその暗闇を少しも不便に感じなかつた盲目の人は常にこう云う闇の中にいるこいさんも亦此の闇の中で三味線を弾きなさるのだと思

うと、自分も同じ暗黒世界に身を置くことが此の上もなく楽しかつた後に公然と稽古することを許可されてからもこいさんと同じにしなければ済まない云つて楽器を手にする時は眼をつぶるのが癖であつたつまり眼明きでありながら盲目の春琴と同じ苦難を嘗めようとし、盲人の不自由な境涯を出来るだけ体験しようとして時には盲人を羨むかの如くであつた彼が後年ほんとうの盲人になつたのは実に少年時代からのそういう心がけが影響して

○

いずれの楽器も纏奥を極めることのむづかしさは同一であらうがヴァイオリンと三味線とはソボに何の印もなく且彈奏の度毎に絃の調子を整えてかかる必要があるのと一通り弾けるようになる迄が容易でなく独稽古には最も不向きである況んや音譜のない時代に於てをや師匠に就いても琴は三月三味線は三年と普通に云われる。佐助は琴のような高価な楽器を買う金もなし第一あんな高張るものを担ぎ込む訳に行かないので三味線から始めたのであるが調子を合わせることは最初から出来たというそれは音を聴き分ける生れつきの感覚が少くともコンマ以上であつたことを示す

と共に、平素春琴に随行して検校の家で待つてゐる間に如何に注意深く他人の稽古を聴いていたかを証するに足りる。調子の区別も曲の詞も音の高低も節廻しも総べて彼は耳の記憶を頼りにしなければならなかつたそれ以外に頼るものは何もなかつた。斯くして十五歳の夏から約半歳の間は幸い同室の朋輩の外に誰にも知られずに済んだのであつたがその年の冬に至つて一つの事件が起つた或る夜明け方と云つても冬の午前四時頃まだ真つ暗な夜中も同然の時刻に、鵲屋の御寮人即ち春琴の母のしげ女がふと厠に起きて何処からともなく洩れて来る「雪」の曲を聞いたのである。昔は寒稽古と云つて寒中夜のしらしら明けに風に吹き曝されながら稽古をするという習慣があつたけれども道修町は菓屋の多い区域であつて堅儀な店舗が軒を列ね遊芸の師匠や芸人などの住宅のある所でもなしなまめかしい種類の家は一軒もないのであるそれにしんと更けた真夜中、寒稽古にしても時刻があまり突飛過ぎる、寒稽古なら一生懸命撥音たかく弾くであらうに微かな爪弾きで弾いてゐるそのくせ一つ所を合点の行くまで繰り返して練習してゐるらしく熱心のさまが想いやられた。鵲屋の御寮人は訝しみながらもその時は大して気にも止めず寝てしまつたがその後二三度も夜中起き出でる毎に耳についたことが